16 世紀から 19 世紀にかけての異人たちの瀬戸内海の風景

The Seto Inland Sea Landscape of Foreigners in the 16-19th Century

西田正憲*

Masanori NISHIDA

摘要：中世末から近世にかけて、瀬戸内海は多彩な異人たちが航行し、航海、寄港地等について多くの記述を残した。16～17 世紀のキリシタン宣教師、17～18 世紀の朝鮮通信使、17～19 世紀のオランダ商館員と、瀬戸内海はこれら異人たちの布教や江戸入府の海の道となっていた。19 世紀にわが国を訪れた近代の欧米人は瀬戸内海の風景を絶賛したが、これに先行するこれら異人たちは瀬戸内海の風景をどのように見ていたのであろうか。これら異人たちの瀬戸内海の風景とは何であったのか、16 世紀半ばから 19 世紀初めにかけての彼らの紀行文、報告、日記等の文献から、瀬戸内海の風景の記述を分析することにより、考察を行うものである。

1. はじめに

瀬戸内海は古代から大陸につながる海の道であったが、中世末からは多彩な異人たちが航行し、16～17 世紀の中世末から近世初めにかけてのキリシタン宣教師、17～18 世紀の近世の朝鮮通信使、17～19 世紀の近世のオランダ商館員、そして 19 世紀の幕末から明治にかけての近代の欧米人と、多くの異人たちが紀行文、報告、日記等に瀬戸内海の航海、寄港地等について多くの記述を残した。瀬戸内海は、平戸や山口から畿内を結ぶキリスト教布教ルートであり、李氏朝鮮国や長崎出島から江戸入府を行う海の道であり、また開国以後は異国に直接つながる海の道であった。19 世紀にわが国を訪れた近代の欧米人は瀬戸内海の風景を絶賛したところであるが、本論は、これに先行する 16 世紀半ばから 19 世紀初めにかけて、異人たちが瀬戸内海の風景をどのように見ていたか、異人たちの瀬戸内海の風景とは何であったのかを考察するものである。

方法は、16 世紀半ばから 19 世紀初めにかけて瀬戸内海を通過したキリシタン宣教師、朝鮮通信使、オランダ商館員の紀行文、報告、日記等の文献から、瀬戸内海の風景に関する記述を読みとり、彼らはそもそも瀬戸内海の風景に眼ざしを向け賞賛したのか、もし眼ざしを向け賞賛したのなら、それはどんな風景か、もし眼ざしを向けず賞賛していなかったら、それは何を意味するのか、について定性的に分析を加え、考察を行うものである。

対象とした文献は、キリシタン宣教師についてはイエズス会の書翰（通信）・報告書・年次報告¹⁻⁹⁾、朝鮮通信使については訪日録・紀行文・遺墨¹⁰⁻¹⁶⁾、オランダ商館員については商館長の公務日記と特使・随行員の報告・紀行文¹⁷⁻²⁵⁾である。朝鮮通信使の訪日録は一部原文影印にあたったが、他は翻訳の出版物にあたった。これらの文献は膨大な原文書等の中のごく一部であり、かつ、その記述内容は布教、公務等の報告という特殊なものであり、資料の制約と限界はあるが、それでも風景に関しかなりの分析と考察は可能であったと考える。本論は、瀬戸内海の風景を対象としたもので先行研究はないが、風景や風景観を考察するうえで意義あるものと考えている。

2. キリシタン宣教師

1549 年キリスト教イエズス会の宣教師ザビエルの到着から 1643 年鎖国の禁教政策までの約 1 世紀に、ヨーロッパからわが国に数多くのキリシタン宣教師が訪れ、日本の布教、政治、風習等に関する書翰（通信）、報告書、年次報告等を残した。キリスト教の布教は九州、山口から畿内へと拡大したが、瀬戸内海はこ

の通路として、府内（大分）、下関、上関、伊予堀江、塩飽本島、岡山、小豆島、室津、明石、兵庫、堺等に拠点と寄港地を形成した。

瀬戸内海を通過しそこで活動した宣教師たちの記録は、ザビエル、フロイス、ヴァリニャーノ、トルレス、ヴィレラ、カブラル、コエリョ、パシヨ、セスペデス、オルガンティノ等と数多く確認でき、各地での布教活動等に関連する細々とした膨大な記述を読むことができるが、瀬戸内海の風景に関しては記述がほとんど残されていない。彼らの旅は、港で何日も風を待ちながら、海賊におびえながら、そして布教の所期の目的を果たせず、瀬戸内海を往き来するという、困苦を極めたものであった。

ポルトガル人の司祭ルイス・フロイスは、1563 年の来日から 1597 年に長崎で亡くなるまで 30 年以上日本に滞在し、膨大な報告書をしたためたが、大著『日本史』の詳細な報告から、瀬戸内海での記録を追うことができる。フロイスは、日本滞在中に、瀬戸内海の東上を 4 回、西下を 3 回くり返している。1565 年の最初の東上では、府内から堀江、塩飽本島、坂越と寄港し堺まで 40 日を要した。1581 年ヴァリニャーノ巡察師の通訳として府内から本島を経て堺に東上した時は大坂湾で海賊に襲われる。1586 年コエリョ副管区長の伴侶として下関から上関、本島、室津、明石、兵庫と寄港し堺に東上した時、室津の風景を賞賛して、次のとおり記している。

「塩飽から、（我らは）室という（塩飽から）二十里距たった、これもまた非常に美しい港に向けて出発した。（中略）その地の小高く、はなはだ展望のよい美しい丘に山寺があって、我らはそこでミサを捧げた。」²⁶⁾

フロイスのこの室津の賛美は瀬戸内海の風景を賞賛する稀なものである。キリシタン宣教師は概して瀬戸内海の風景を賞賛することはなかったと指摘してよい。このことは、彼らの残した文書はその布教報告という性格から風景描写が少なかったのだと推測できるかもしれない。しかし必ずしもそうではない。事実他の所の記述では、どれも短く簡単ではあるが、「美しい都市」「高貴かつ美しい（城）」「華麗かつ豪華な寺社」「素晴らしく造られた（庭）」と都市、城郭、社寺、庭園を賛美し²⁷⁾、また「美しい海岸」と記し²⁸⁾、富士山についても賞賛の記述を残す²⁹⁾など風景について記している。彼らは瀬戸内海の風景には眼ざしを向けることは少なかったのである。特に自然景の記述は見だし難い。これに比べ人文景の記述はわずかであるが見いだすことができる。皆無に近い瀬戸内海の風景の記述の中で宮島は比較的詳しくふれている一例である。宮島は当時海路の要港として繁栄しており、キ

*環境庁京都御苑管理事務所

リシタン宣教師も寄港することがあった。報告書『1603,04 年の日本の諸事』は、異教徒の宗教に関連して厳島神社を捉えたものであるが、厳島神社を賞賛して次のとおり記している。

「或る島に見事な細工の華麗な建造物が彼女（神）のために作られた。そして、潮が満ちると、それらすべての建造物の下に海水が入り、海水の上に建立されているかのように見える。そしてこの偶像の前には絶えずたくさんの打火が燃えている。建物の古いこと、豪華な装飾、捧げられる多くの供物、その場所がいとも清涼であることによって非常に名高い。」³⁰⁾

キリシタン宣教師の文献には、概して瀬戸内海の自然景の賞賛の記述を見いだすことはできない。先に記したフロイスの「はなはだ展望のよい美しい丘」は、「山寺」の位置する場所として記述したのであろうが、瀬戸内海の自然景の記述としては特異な例である。後の 19 世紀以降の欧米人が瀬戸内海の内海多島海等の風景を印象として全体的に捉え豊かに語ることに比べると、キリシタン宣教師は自然物にしても人工物にしても対象を個々の物として要素的に捉えていた。フロイスの「丘」は風景の観賞というよりむしろ物の観察に近い。文献で見る限り、キリシタン宣教師の風景に対する眼なごしは、都市、建築、庭園といった人工的な人文景に向かっていたのであり、概して瀬戸内海の自然景に向かうことはなかったといつてよい。

3. 朝鮮通信使

江戸時代の朝鮮通信使は 1607 年の回答兼刷還使を第 1 次の修好使節とし、以後將軍の就任祝いの使節等として 1811 年の通信使まで 12 次（瀬戸内海通過は 11 次まで）に及んだ。通信使の一行は、詩書画をたしなむ文人でもある正使、副使、従事官や、製述官、画家等からなり、訪日録、紀行文（日記）を編纂し書や絵を使館（宿舎）等に残した。瀬戸内海は江戸入府の通路として、下関、上関、蒲刈、鞆、牛窓、室津、明石、兵庫に寄港し、津和地、下津井、日比等を適宜海上の泊地とし、航行に 20 日間程度を要した。

朝鮮通信使の瀬戸内海の風景について特筆すべきは、鞆（鞆浦）の福禪寺対潮楼から眺めた瀬戸内海の風景の賞賛である。使館となった福禪寺の客殿対潮楼からの風景に対する特別な執着は朝鮮通信使の風景が何であったかよく物語る。この風景は 1711 年の第 8 次通信使によって「日東第一形勝」と称され、対潮楼に残る従事官李邦彦揮毫の扁額「日東第一形勝」によって、今もわが国で語り伝えられている。「日東第一形勝」とは日本一の景勝という意味である。琵琶湖、富士山等も見た一行は帰路鞆で語り合い対潮楼から見る仙酔島を中心とした瀬戸内海の風景を日本一だと称したのである³¹⁾。鞆の福禪寺対潮楼からのこの風景は朝鮮通信使の間で時を越えて定着していた。

1617 年第 2 次回答兼刷還使従事官の李景履は『扶桑録』で「鞆浦に到り、則ち最も明秀奇絶と為す」と記す³²⁾。1655 年第 6 次通信使従事官の南龍翼も『扶桑録』で「若し海路の形勝を論ぜば、則ちまさに以て第一と為すべく、而して洞庭と雄を争うべきなり」と記し³³⁾、同訳官の金指南も『東槎日録』で「海山之絶勝歴路之第一」と記し³⁴⁾、この言葉を 1711 年第 8 次通信使押物通事の高頭門も『東槎録』で引用している³⁵⁾。同第 8 次通信使副使任守幹・従事官李邦彦の『東槎日記』では「眼界広豁にして形勝最も佳しと云う」と伝え³⁶⁾、1719 年第 9 次通信使正使の洪致中は『東槎録』で「大海山川秀麗にして景致之勝、歴路未だ見ぬ所なり」と記し³⁷⁾、同製述官の申維翰は『海遊録』で「人みなここにいたると、第一の観なりと主張してゆづらない」と記す³⁸⁾。福禪寺に残る漢詩にも、1711 年第 8 次通信使正使趙泰億の「縹緲鰲頭最上台」、1748 年第 10 次通信使副使南泰蒼の「東南形勝地第一此高楼」、同書記李鳳煥の「東南第一勝」、同書記柳近「東極百尋楼」、同軍官洪景海の「果然第一楼」、とこの場所が優れた展望

地であることを記している³⁹⁾。また、同従事官の曹蘭谷は『奉使日本時間見録』で、また同軍官の洪景海は『隨槎日録』で、「日東第一形勝」の言葉を伝えている⁴⁰⁾。1764 年第 11 次通信使の正使の趙曦は『海槎日記』で次のとおり記している。

「館す所即ち海岸山福禪寺なり。前後の信使皆鞆浦（鞆浦）をもって日本沿路之第一勝景と為す」⁴¹⁾

通信使の一行は、過去の通信使の記録を読み、過去の通信使たちが賞賛した風景を確認し、さらに賞賛した。第 10 次通信使は福山藩の手違いから往路で鞆の使館が変更され、その理由も嘘をつかれたため、三使は憤激して慣例の藩の饗応を断るが、それだけ通信使にとって鞆の風景は必ず見るべきものとして重要であった。前任者と同じように、あるいはそれ以上に、散文や韻文で賞賛することはさらに重要であった。通信使は鞆の風光明媚を訪日録等に記し漢詩で詠み、時を経て文章の中に定着させていった。鞆から見る瀬戸内海の風景は多くの賞賛を経て、「歴路之第一」「日東第一形勝」「日本沿路之第一勝景」等に結実し固定していったのである。

朝鮮通信使が賞賛したこの鞆の風景はどんなものであったろうか。1655 年第 6 次通信使正使の趙珩は『扶桑日記』で「地勢は最も高くして眼界極めて闊し、小島は或は遠く或は近く前後に羅列す」と記し⁴²⁾、同従事官の南龍翼（前出）は次のように記す。

「福禪寺に館す。爽塏比べるとなく、滄海に俯し、眼界ただに千里のみならず、遠くは伊予、讃岐の諸州、近くは電戸、尾路等の島、天畔に隱約し、雲間に明滅す。たまたま雨はるるに当り、海晏にして鏡の如く、風帆来去、沙鳥こもごも翔ぶ。」⁴³⁾

瀬戸内海の高台と島々を眺望し、かなり自由な眼なごしで賞賛しているかのようである。福禪寺に残る漢詩にも、その風景に関する部分は、穏やかな海あるいは潮の流れる海に浮かぶ島々、広がる空や遠くの山並、そして舟、村、燈火、煙、雲、月、松などを詠んでいる。しかし、これらの風景は高樓から見るというある定型的類型的なものである。高台から穏やかな水面を眺め、そして人間的な思いをめぐらすという伝統的な風景のコードに合致しているのである。これらの図式となっているのは、中国の岳陽楼から見る洞庭湖の風景である。洞庭湖は瀟湘八景の地であり、また湖畔の岳陽から望む洞庭の風景は絶景といわれ、文学や絵画に定着した名勝地であった。孟浩然、杜甫、賈至等の唐の漢詩は有名である。朝鮮通信使の人々自身が中国内陸部のこの名勝地を実際には見たわけではなかったが、文学や絵画で知っていたのであり、強くコード化されていたのである。比較的自由に記述したと思われる 1655 年第 6 次通信使正使の趙珩（前出）も先の引用の後に「岳陽洞庭」を引合いに出しているし⁴²⁾、洞庭と雄を争うと記した同従事官の南龍翼（前出）は別の『聞見別録』でも先と同じような鞆の風景描写の後に「画図の如し」と記している⁴⁴⁾。以後もこの鞆の風景は洞庭湖岳陽楼に比すべき風景として伝えられる。1748 年第 10 次通信使従事官の曹蘭谷（前出）は「岳陽楼」「洞庭岳楼」と、そして同軍官の洪景海（前出）は「その勝景は岳陽楼と伯仲すべしと云う」と伝えている⁴⁵⁾。1764 年第 11 次通信使正使の趙曦（前出）は「或は洞庭湖に比し、或は岳陽楼に比す」と記し、同書記の成大中は『日本録』で「鞆浦牛窓之間山水絶勝」と讃え「鞆浦福禪寺をもって岳陽楼に比す」と記している⁴⁶⁾。

朝鮮通信使は瀬戸内海では鞆の風景をことのほか絶賛したが、上関を景致絶勝と讃えるなどその他も賞賛していた。1719 年第 9 次通信使製述官の申維翰（前出）は『海遊録』で瀬戸内海を詳しく記し、瀬戸内海の風景を下関、三田尻、蒲刈、鞆、牛窓、赤穂、室津、明石と各地で賞賛している。かなり自由な眼なごしを向けているかのようであるが、やはりその風景は、中国の湖に例えたり、絵画の如くと記しているように、あるコード化された風景を見いだしていたことがうかがわれる。次のように記している。

「日が西にかたむく頃、山光水色は漸くにしてますます奇、あたかも鏡湖か通塘（いずれも中国の湖名）の中に入ったが如く、種々の雲物が、海浦蛟涎の気を見ない。」「赤間関（下関）を出発して以来、経るところ山にあらざるはなく、山の根には白沙青松を夾み、それがまるく湾曲しながら長くつづいて、画中の景を作り、人をして眼を熱くさせる。」「明石城を過ぎると、長い松原が北岸につらなり、蕪樓や村里がその間に隱影し、玲瓏として炫耀するさまは、さながら一幅の佳き画の如くである。」⁴⁷⁾

ここにあるのは、ある自由度はあるものの基本的にはコード化された風景の見方である。コードは中国文化の文学、山水画等である。「鏡湖」は「邑中の名勝」と称えられた中国の湖であり、「画中の景」と「一幅の佳き画」は山水画に由来するものである。

瀨戸八景の風景は、元の実景を離れ、絵画や文学に様式化された風景として伝播した。このように、ある風景が、記号のように、元の実景から遊離し、人々の間に普及定着することを風景のコード化という。風景観とは実景に強く結びついた具体的なものから実景を離れ記号と化した象徴的なものまで幅があるが、実景の具体的な風景観ではなく記号的象徴的な風景観を風景のコードという。コード化は同じ文化を共有する集団の間において慣習的に成立するものである。朝鮮通信使の文人たちが鞆の風景にそれほど執着したのは、散文や韻文で表現する対象として適当であったのであり、それは新しい未知の風景を発見したからではなく、文学や絵画のコードに合致した風景を見いだしたからである。

4. オランダ商館員

1609年オランダは貿易の商館を平戸に開設し1641年長崎出島に移転した。江戸時代このオランダ東インド会社のオランダ商館長は、将軍に拝謁するため、1633年から1790年までは毎年、以後1850年までは5年目毎に1回、合計166回の江戸参府を行った。江戸参府の記録を商館長（又は代理等）は公務日記に、随行員は紀行文等に残している。随行員は当初は医師、書記等の4名であったが、後に医師と書記の2名さらに1名となった。瀬戸内海は江戸参府の通路であったが、決まった寄港地はなく、関門海峡から室津、兵庫又は大坂まで通常7～10日間程度を要した。

オランダ商館長日記は17世紀のクーケバッケル、ハーヘナール、カロン、メール、エルセラック、オーフルトワーテル、ツム、フェルスターヘン、コイエット、ブrouckホルスト、ステルテムウス、ブルフ、ハッパルト、19世紀のワルデナール、ゾーフと多数確認できるが、彼らは大航海時代の優れた統率者であり商人であったのか、あるいは基本的に公務を記録した日記であったのか、報告は実務的な傾向が強い。しかし、わずかではあるが彼らの記述の中から風景に対する眼なごしを捉えることができる。彼らもキリシタン宣教師と同様「(都市の)社寺や好風景の所を見物」「(都市の)大建築数か所を見」「美しい城」「美しい庭園」と記述するように⁴⁸⁾都市、建築、庭園といった人文景に眼を奪われていた。そして瀬戸内海では城郭や市場町の他段畑の生活景を評価する。特使ピーテル・ノイツとピーテル・ムイゼルは商館が平戸にあった1627年に台湾から平戸を経て瀬戸内海を東上したが、その公務日記に次のとおり記している。

「今日は、美しく耕された畑や市場町のあるいろいろな島の間を通過した。(中略)又堂々たる日本の城のある、小きれいな町で、木の茂った山の麓の流れに沿った大きな湾に面している三原という町を通過した。備後の鞆から七マイルである。午後、更に美しく耕された山や谷を過ぎ、順調に進んで、忠の海から十マイル、上の関から四十マイルの備後の鞆を通過した。夕方、大きな、高い城址のある下津井と呼ばれる村を通過した。(中略)今朝夜明けに、かなり美しい市場町で、下津井から十マイルにある、海辺の町、牛窓を通過した。」⁴⁹⁾

彼らは瀬戸内海の町や城や耕された段畑の人文景・生活景を美しいと評価している。瀬戸内海の記述には19世紀初めまでは概してこのような風景の評価しかみられない。多島海をこれほど航海し、「諸島や湾の間を通り」「多数の島の間狭い海を通る」と記述しながら、わずかに「美しい砂浜」という記述はみられるものの⁵⁰⁾、概してその自然景を評価することはなかった。

後に17世紀最大の旅行博物者とまでいわれたドイツ人のエンゲルベルト・ケンペルは、東インド会社の医師として1690年来日、約2年間日本に滞在し、1691年と92年の2回江戸参府に随行し、大著『日本誌』の第5巻には1691年の江戸参府の詳細な紀行文(邦訳『江戸参府旅行日記』)を記し、瀬戸内海についても詳しく記述している。1691年ケンペルは瀬戸内海を下関から上関、屋代島地の家室、津和地島、蒲刈、御手洗を経て、来島海峡から鼻栗瀬戸を通り、鞆、白石、下津井、牛窓、室津、明石、兵庫を経て大坂に到着する。ケンペルは、地誌の他、自ら歩いた下関や室津の町、源平合戦や兵庫築堤の故事、瀬戸内海を航行する参勤交代などを客観的に克明に描写しているが、ケンペルの紀行文の中に瀬戸内海の風景を賞賛する文章を見いだすことができない。やはりキリシタン宣教師やオランダ商館長と同様「美しい町」「美しく立派な城」「美しい寺院」「美しく照り映える堂」「頂上までいわば階段状に耕された周囲の山々」と町や建築物や段畑といった人文景・生活景についてはわずかに賞賛するが⁵¹⁾、自然景の賞賛はほとんどない。後の19世紀に賞賛される塩飽諸島の多島海を通る時も、眼なごしは町や城の構え、松の人工的な配列、幾何学的な形の島に向かい、次のとおり記すのみである。

「夜明けと共に錨を上げ、たくさんの島が浮ぶ広い海を過ぎ、船を七里進めて下津井という小さい町に着いた。この町は本州の備中国にあり、普通の石を積上げた海岸で、岩の多い山の麓にある。その山の上には松の木がきちんと列をなして並び、みごとであった。これはほとんどすべての開墾された島の山頂と同様であった。(中略)向って右手には石造りの塩飽の城があり、その傍に小さな村がある。ここから遠くない航路の真ん前に、再び槌山という人目をひくピラミッド形の島〔大槌山〕が見えた。すでに大分前から下津井あたりで東の方に見えていた島である。」⁵²⁾

ケンペルと同様東インド会社の医師として1775年から76年に滞日したスウェーデン人のカルル・ツンベルグは、後に植物学の権威となり日本研究の泰斗ともなった人物であるが、1776年オランダ商館長の江戸参府に随行し、1788～93年に紀行文『1770年から79年にかけて行われた、ヨーロッパ、アフリカおよびアジアへの旅』(一部邦訳『ツンベルグ日本紀行』)を出版、その中で瀬戸内海にふれているが、多くにふれず次のとおり記している。「我々は上ノ関で三週間待たねばならなかった。(中略)長い間待った後漸く順風が吹き出した。我々は錨を上げて地ノ家室に真直ぐに向ひ、ここに入港した。この短い間の海を渡る間、我々は大小様々な島の間を行つた。この近海は島で一杯である。」⁵³⁾

ツンベルグは、自由な行動もできず、植物研究も成果が得られず、風待ちによる26日間の難渋する瀬戸内海の航海にうんざりし、風景を讃えるどころではなかったのかもしれない。しかしツンベルグが「島で一杯」と見た瀬戸内海は、19世紀のフィッセル、シーボルト以後の欧米人の到来によって内海多島海の風景として賞賛されることとなる。19世紀初めのオランダ商館長ゾーフまでの文献には、瀬戸内海の風景の賞賛は、わずかに人文景・生活景について見られるが、自然景については皆無に近いと指摘できる。

5. おわりに

16世紀から19世紀初めにかけてのキリシタン宣教師とオランダ商館員は、瀬戸内海の風景について、わずかに町や建築や段畑

といった人文景・生活景に眼なごしを向け賞賛することはあっても、自然景を賞賛することはないに等しかった。文献からは、19世紀初めまでのキリシタン宣教師とオランダ商館員には瀬戸内海の自然景を賞賛する風景観を読みとることができない。後に幕末から明治にかけての欧米人が瀬戸内海の風景を内海多島海等の風景としてとばしるように豊かに賞賛するが⁵⁴⁾、彼らにはこのような記述は見いだせない。19世紀の中頃になって、瀬戸内海の内海多島海等の風景は欧米人によってようやく捉えられ始めたものであり、そのような風景を捉える風景観が現れたのである。これは、19世紀初めまでのキリシタン宣教師とオランダ商館員には見いだせないものであり、中国文化のもとに強くコード化された朝鮮通信使の風景観とも異なるものであった。17世紀から18世紀にかけて朝鮮通信使が絶賛した瀬戸内海の風景は瀟湘八景等のコードに見られるような中国文化の影響下にある定型的類型的風景であった。

ヨーロッパにおいては15～16世紀のルネッサンス期によりやく自然が風景として対象化され発見される⁵⁵⁾。そして、17世紀頃

から海洋が徐々に絵画のモチーフとなり始め⁵⁶⁾、19世紀になって風景が風景画として絵画の中心テーマとなっていくように⁵⁷⁾、16世紀から19世紀にかけて様々な風景が台頭し捉えられる。一方中国においては4世紀の六朝時代すでに詩と山水画において自然を中心テーマとし、ヨーロッパとは異なる仕方風景を発見していた⁵⁸⁾。それらの風景は自然主義的・象徴主義的、近代的一伝統的といった図式で概括的に対比できるように内実は大きく異なるものであった。キリシタン宣教師とオランダ商館員も、そして朝鮮通信使も、このようなコンテクストの中にあつたと考える。瀬戸内海の自然景が発見されるのは19世紀の近代的風景観によってであり、それ故19世紀初めまでのキリシタン宣教師とオランダ商館員の文献には瀬戸内海の自然景の記述が見いだせないのである。一方朝鮮通信使が欧米人に先駆けて瀬戸内海の風景を絶賛したのは中国文化に由来する伝統的風景観によるものであったのである。瀬戸内海の内海多島海等といった自然景は19世紀の欧米人によって発見されたものであり、19世紀初めまではこのような自然景を評価する眼なごしはなかったのである。

引用・参考文献

- 1) 村上直次郎訳 (1968,69): イエズス会士日本通信 上・下: 雄松堂書店
- 2) 村上直次郎訳 (1969): イエズス会士日本年報 上・下: 雄松堂書店
- 3) 松田毅一監訳 (1987~94): 十六・七世紀イエズス会日本報告集第Ⅰ期第1~5巻, 第Ⅱ期第1巻, 第Ⅲ期第5~7巻: 同朋舎出版
- 4) 高瀬弘一郎 (1981,88): イエズス会と日本一・二: 岩波書店
- 5) 東京大学史料編纂所編 (1991): 日本関係海外史料イエズス会日本書翰集訳文編之一(上): 東京大学出版会
- 6) 松田毅一編 (1987): 日本関係イエズス会原文書: 同朋舎出版
- 7) ザビエル, F 河野純徳訳 (1985): 聖フランシスコザビエル全書簡: 平凡社
- 8) フロイス, L 松田毅一他訳 (1977~92): 日本史1~12: 中央公論社
- 9) ヴァリニャーノ, A 松田毅一他訳 (1979): 日本巡察記: 平凡社
- 10) 辛基秀・仲尾宏編 (1993~95): 大系朝鮮通信使第3~8巻: 明石書店
- 11) 福山市轄の浦歴史民俗資料館編 (1990): 朝鮮通信使と福山藩港・轄の津: 福山市轄の浦歴史民俗資料館推進協議会
- 12) 申維翰 姜在彦訳 (1974): 海游録: 平凡社
- 13) 片野次雄 (1985): 徳川吉宗と朝鮮通信使: 誠文堂新光社
- 14) 李進熙 (1987): 江戸時代の朝鮮通信使: 講談社
- 15) 辛基秀 (1993): わが町にきた朝鮮通信使Ⅰ: 明石書店
- 16) 朴春日 (1992): 朝鮮通信使史話: 雄山閣出版
- 17) 永積洋子訳 (1969): 平戸オランダ商館の日記第1~4輯: 岩波書店
- 18) 村上直次郎訳 (1956~58): 長崎オランダ商館の日記: 第1~3輯
- 19) 日蘭学会編 (1989~95): 長崎オランダ商館日記1~5: 雄松堂書店
- 20) 東京大学史料編纂所編 (1975~91): 日本関係海外史料オランダ商館長日記訳文編之1~7: 東京大学出版会
- 21) カロン, F 幸田成友訳 (1967): 日本大王国志: 平凡社
- 22) ゴーフ, H, フィッセル, O 齊藤阿具訳 (1928): ゴーフ日本回想録: 駿南社
- 23) ケンペル, E 今井正訳 (1987): 日本誌上・下巻: 霞ヶ関出版
- 24) ケンペル, E 齊藤信訳 (1977): 江戸参府旅行日記: 平凡社
- 25) ツンベルグ, C 山田珠樹訳 (1929): ツンベルグ日本紀行: 駿南社
- 26) 前掲書8の11,29
- 27) 前掲書3の第Ⅰ期第4巻,158,177,第5巻,26,第Ⅲ期第7巻,81等
- 28) 前掲書3の第Ⅲ期第5巻,101等
- 29) 前掲書3の第Ⅰ期第5巻,142
- 30) 前掲書3の第Ⅰ期第4巻,168
- 31) 前掲書11,45-51 32) 前掲書13,146
- 33) 前掲書10の第3巻,176
- 34) 前掲書10の第3巻,214
- 35) 前掲書10の第4巻,148
- 36) 前掲書10の第4巻,120
- 37) 前掲書10の第5巻,121
- 38) 前掲書12,100
- 39) 前掲書15,74,82,84-86
- 40) 前掲書10の第6巻,153,212
- 41) 前掲書10の第7巻,132
- 42) 前掲書10の第3巻,148
- 43) 前掲書10の第3巻,176
- 44) 前掲書10の第3巻,194
- 45) 前掲書10の第6巻,132,153,181
- 46) 前掲書10の第7巻,132,168,169
- 47) 前掲書12,85,93,105
- 48) 前掲書18の第3輯,209,292,前掲書20の2下,208,前掲書18の第2輯,240等
- 49) 前掲書17の第1輯,17,18
- 50) 前掲書18の第1輯,266,第3輯,129,第2輯,126等
- 51) 前掲書24,110,102,103,235,106等
- 52) 前掲書24,105 53) 前掲書25,121,122
- 54) 例えばシーボルト, フォーチュン, アンペール, リヒトホーフエン等
- 55) クラーク, K 佐々木英也訳 (1967): 風景画論: 岩崎美術社, 主に第2章, ベルク, A 篠田勝英訳 (1990): 日本の風景・西欧の景観: 講談社, 53-58
- 56) クラーク前掲書55,30, コルバン, A 福井和美訳 (1992): 浜辺の誕生: 藤原書店, 90-93等
- 57) クラーク前掲書55,3及び主に第5章
- 58) ベルク, A 篠田勝英訳 (1988): 風土の日本: 筑摩書房, 170, サリヴァン, M 中野美代子他訳 (1995): 中国山水の誕生: 青土社, 主に第3章

Summary : Various foreigners sailed through the Seto Inland Sea and left many descriptions about the navigations, the ports and so on from the end of mediaeval ages to the Edo era. Christian missionaries in the 16-19th century, Korean friendly delegations in the 17-18th century, and Dutch trade missions in the 17-19th century, these foreigners passed through the sea to propagate Christianity or to visit Edo Castle. The paper considers what landscape they had appreciated before westerners admired in the 19th century, through analyses of such travel accounts, reports and diaries that showed descriptions related to the landscape from the middle of the 16th century to the beginning of the 19th century.